

～異常気象に強いコメづくりの実践～

**適期中干し・溝切りで「適正な茎数」「健全な根」を確保！**

昨年は、籾数過剰による品質低下が見られました。

適期に中干しを開始することにより、適正茎数（穂数）を確保し、籾数過剰の防止に繋がります。茎数などの生育状況を見極め、中干しは遅れずに開始しましょう。

**ここがポイント！！**

- 1 適期に中干し開始（田植え 30 日後頃、目標穂数の 7 割の茎数を確保した時点）
- 2 溝切りは必ず実施し、溝の末端は水口・水尻につなげる
- 3 中干しは小ヒビが入る程度とし、遅くとも出穂 1 か月前までに終了
- 4 ケイ酸追肥により、高温登熟による品質低下を軽減
- 5 いもち病の適正防除（新之助、多収穫米 等）

**1 良質茎の早期確保にむけた水管理**

- 活着後は 2～3 cm の浅水管理により下位分けつの発生を促す。水を更新する場合は早朝にかん水し、日中は止水として水温の上昇を図る。
- 5月下旬から、地温の上昇に伴いワキの発生が多くなる。ワキの発生が多い場合は、用水の入れ替えや夜間落水等を行い、土壌へ酸素を供給し根の健全化を図る。（表1）
- 表層剥離やアオミドロの発生が多い場合は、薬剤散布も検討する。

表1 ワキの発生程度とその対策

ワキの程度	ワキの発生程度	水稻生育への影響	対策
中	水田に足を踏み込むと気泡の発生が多い。	根活力低下	用水の入れ替えと夜間落水を行う
多	水田に足を踏み込むと盛んに気泡が発生する。	根張り不良	用水の入れ替えと夜間落水を繰り返す
甚	晴天時自然に気泡を発生し、音が聞こえる。また、水田を歩くと著しく気泡を発生する。	根伸長阻害 地上部黄化	用水の入れ替えを繰り返しながら、間断かん水へ移行し、早めに中干しに移行する

## 2 中干し・溝切りの適期実施

### (1) 中干し・溝切りの効果

- 無効茎の発生抑制による適正生育量の確保
- 下位節間の伸長抑制による倒伏軽減
- 土壌への酸素供給による根の健全化
- 収穫時の機械作業が容易な地耐力の確保
- 溝切りによりフェーン等緊急時の迅速なかん水や、長雨による停滞水の排水が可能

### (2) 中干し開始のめやす

- 中干しは、目標穂数の70%の茎数を確保したら直ちに開始する。
- 田植え30日後には茎数を確認し、遅れずに中干しを開始する。

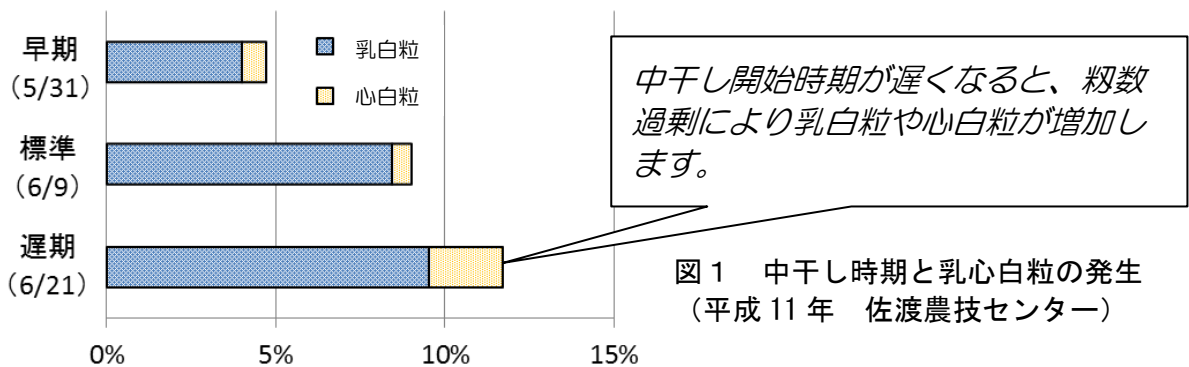


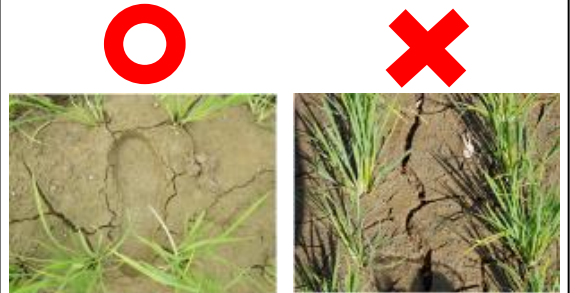
表2 中干し開始のめやす及び中干し程度

品 種	目標穂数 (本/m <sup>2</sup> )	中干し開始めやす		中干しの程度	
		(本/m <sup>2</sup> )	(本/株)		
			50 株植		60 株植
コシヒカリ	350	245	16	14	小ヒビが入る程度
こしいぶき	400	280	18	15	
新之助	400	280	18	15	

適期は条間が葉で重なり合う前です。  
株毎に茎数を数えて適期を確認！



軽く足跡がつく程度で中干し終了。  
大ヒビは入れない！



### (3) 溝切りの実施

- 中干しの効果を高めるため、溝切りは必ず実施する。

○溝は間隔 2.5m 程度、深さ 10cm 以上とし、末端は必ず水口、水尻に繋げる。

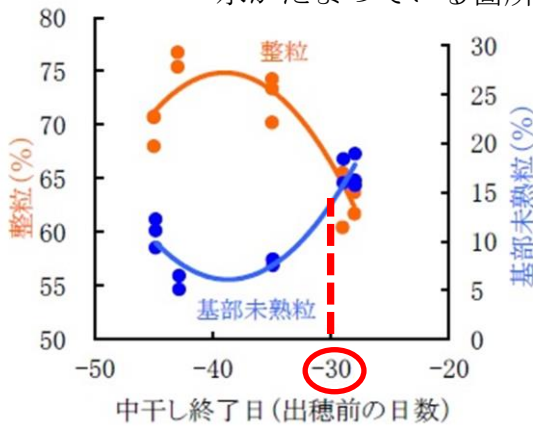
### 3 中干し終了後の栽培管理

#### (1) 水管理

- 中干しは、遅くとも出穂 1 か月前には終了する。
- 中干し直後はうわ根の発根促進や根の健全化のため、浅水の間断かん水を実施し、徐々に飽水管理に移行する。
- 幼穂形成期以降は、飽水管理を徹底することで根の健全化を図る。
- 高温下での長期間湛水は根腐れの発生につながりやすいので、こまめな水管理を行う。

\* 間断かん水：湛水状態と落水状態を数日間隔で繰り返す。

\* 飽水管理：水尻は止水し、自然減水で田面の水がなくなり、溝や足跡の底に水がたまっている箇所が散見される状態になったら、かん水する。



中干し終了時期が遅れると  
整粒歩合が低下し、  
基部未熟粒が増加します。

図3 中干し終了時期と基部未熟粒の発生  
(平成 22 年 作物研究センター)

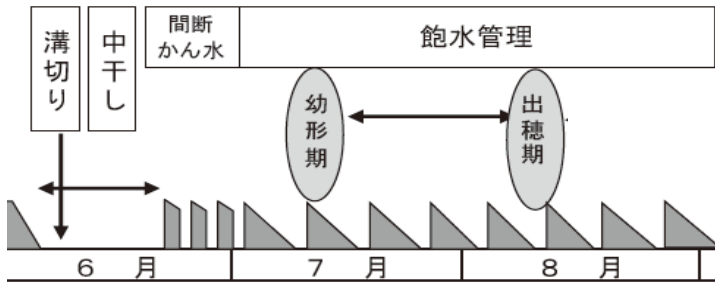


図4 水管理のイメージ

飽水管理のめやす

足跡や溝など (○の部分) に  
水がなくなる前にかん水します。



#### (2) ケイ酸追肥

- 基肥にケイ酸を施用していない場合、  
出穂 40 日前～1 回目穂肥の時期に施用  
(資材で 20~40kg/10a 程度) する。

出穂 40 日前から 1 回目穂肥時のケイ酸の施用  
によって品質向上が期待できます。  
高温年はケイ酸の追肥によって品質低下が軽減  
されます。

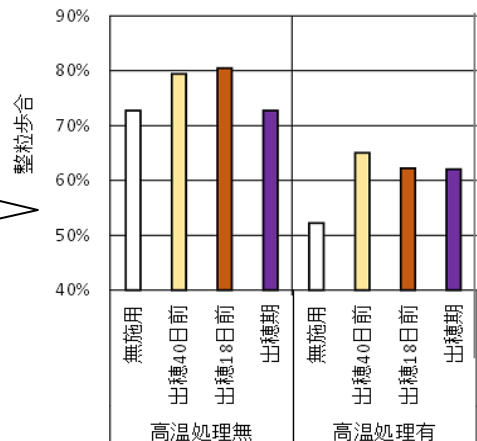


図5 ケイ酸追肥時期別の整粒歩合  
(平成 26、27 年 作物研究センター)

## 4 病虫害防除

### (1) 葉いもち防除

- 補植苗はいもち病の発生源となるので、早急に取り除く。
- 「新之助」や「わたぼうし」などいもち病に弱い品種で、予防薬剤を育苗箱施用していない場合は、6月第2半旬までに予防粒剤を水面施用する。

### (2) 斑点米カメムシ対策

- カメムシの密度を低く抑えるため、雑草種子が結実しない間隔（3～4週間）で定期的に畦畔や農道の草刈りを徹底する。
- ヒエやホタルイはカメムシの産卵場所となることから、水田内にヒエやホタルイがある場合は、中・後期除草剤散布等による雑草防除を行う。除草剤の種類によって、散布後の気象条件により薬害が発生する場合がありますので、使用にあたってはラベルに記載されている使用基準や使用上の注意事項等を必ず確認する。

## 5 「新之助」栽培のポイント

- 異品種混入防止等のため、「新之助」作付け1年目のほ場では、前年の漏生籾由来の稲株を確実に除去する。
- 茎数が増えやすい品種のため、中干し・溝切りが遅れないようにする。

### メールマガジン登録募集中！

気象や生育状況に基づいた水稻栽培のポイントやフェーン等の緊急対応に関する情報を素早く確実にお届けします。  
初心者もベテランも日々の作業のお供に、ぜひ登録を！

[ngt112130@pref.niigata.lg.jp](mailto:ngt112130@pref.niigata.lg.jp)

こちらからもメールできます↑

※件名に「水稻情報メルマガ登録希望」、本文に「お名前」「住所」「電話番号」をご記入ください



詳しい情報はHPで公開しています

検索 新潟農業 作物技術情報